

報告3 デンマーク・シルケボー

24時間ケア付子どもの家に出会った



9月20日、デンマーク・シルケボー自治体。
人口3万人。森と湖のある静かな町だ。

重い障害のある子どもたちの特別幼稚園・保育園
（「ひまわり」）を訪ねた。案内してくれたOTのデ
ニシヤさんは、スリランカ出身の両親のもとデンマ
ークに生まれ育ったそうだ。

園には、0歳から6歳までの子どもたち13人が
通ってくる。スタッフは保育士だけでなく、OT（作
業療法士）、PT（理学療法士）、ペタゴ（生活支
援員）がいる。一人の子どもに一人のスタッフがつ
き、それをチームとしてとりこんでいるという。

別棟には、デンマークでもいち早くつくられたと
いう「スヌーズレンハウス」があった。

◆
その棟につながる2階建ての棟では、学齢期の子



どもたちが暮らし、市
内の国民学校などへと
通っているという。

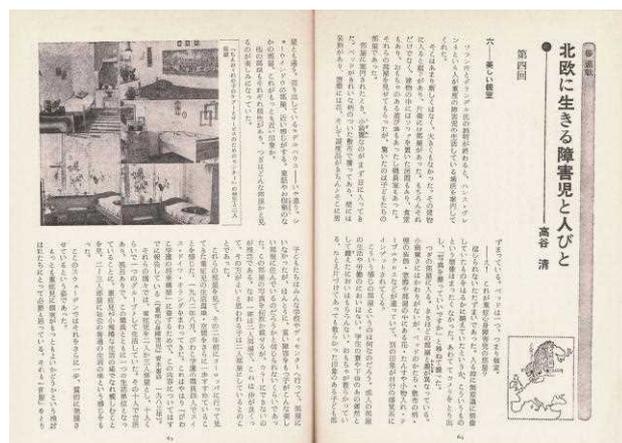
「ソルボー」と言っ
ていたが、ここは学校
に付属する「寄宿舎」
ではない。自治体の責
任で運営するいわば
「24時間ケア付子ども
の家」だ。現在は13
名が暮らしている。

「学齢期の終わる18
歳からは、ここから出て、どこでどうしているの？」
と質問した。「グループホームはあちこちにあるの
で、18歳以降はそうしたところに移ります。強度
行動障害のある人たちはオーフス市の近くにある専
門のところに移ります」

ストックホルムのハビリテーリングセンターで聞
いた、学齢期の障害の重い子たちのくらしの場が、
デンマークのユトランド半島の小さな町にもあっ
た。わたしは、はじめて「ケア付き子どもの家」に
出会った。

◆
病院の医療的ケアを脱した重い障害のある子らは
自治体の責任で、親元を離れて暮らし、学校（特別
学校もあれば統合教育している学校）へ通う。卒業
後は「新しい家族」ともいえる手厚いサポートのあ
る「グループホーム」で暮らす。

そういえば、わたしが強く北欧にひかれたきっか
けとなったびわこ学園元園長・高谷清さんの「みん
なのねがい」連載「北欧に生きる障害児と人びと」
（1985年）に報告されていた「美しい個室」の記





述を思い出した。



「もっと重い人、重症心身障害の人たちはどこにいるの?」。そうした子どもたちの訪問教育をつづけているメンバーがささやいた。

医療が必要で病院にいる重度の子らはいらる



う。でも、病院から出た重い子らはハビリテーションセンターや保育園、学校教育など総合的な手厚い教育・支援のなかで、わたしたちの想像以上に障害は重くなくなっているのかもしれない。(菌部英夫)

▼シルケボーの町中でかわいらしい女の子が自転車に乗ってやってきた。後ろのカゴにはカンケンバックがある。「どちらから来られたのですか? ニーハオ?」「ヤーパンだよ。ところであなたは高校生?それとも大学生?」。彼女は、「高校生と大学生の間なの」フフフと微笑んで去って行った。ここは、そんな素朴な小さな町だ。



▶駅舎には「改札口」は無く、「ホーム」?にはバス停があった。

